

会津の皆様へ。

私は喜多方で生まれ育ち、陸上競技に明け暮れる青春を過ごしておりました。故郷を飛び出してわらび座に入り、「自分が人様のためにできる事は一体何だろう」と模索し、もがきながら、わらび座で舞台を創り続けてきました。

東日本大震災以降、「希望」を描くことが舞台に課せられた仕事だと思っています。不思議なもので、そう思い定めてから会津に縁の有る方と出会うことが多くなりました。白虎隊の生き残りである飯沼貞吉の御子孫の方は石巻赤十字病院の元院長。被災地医療の講演をされている時に会いました。飯沼貞吉は、戊辰戦争の後、敵だった長州（山口）で再教育を受け、通信技師として北日本に電信網を張り巡らせる仕事、いわば「戦争で分断された日本を一つに結ぶ仕事」をした、という話に感銘を受けました。

同じころ「いつだって青空」の主人公「井口阿くり」の父親は、秋田藩を新政府側に導いた急進派の一人でした。秋田は奥羽越列藩同盟を裏切ったと、東北中から攻め込まれ、わらび座の近くも焦土になったと言われています。しかし、その娘「阿くり」はアメリカに留学し、文化や肌の色の違いを痛いほどわかった上で、ダンスやスポーツには、違いを乗り越えて分かり合える力がある事を学び、帰国後、女子体育の発展に尽くします。

明治という新しい世になって、新しい夢の種を蒔き続けた人たちが沢山いました。しかし、その志は、未だかなえられていないのかもしれない。

劇中に「オリンピックは平和のための祭典だ」というセリフがあります。「いつだって青空」は2019年に初演されましたが、その当時はコロナで東京オリンピックが延期になり無観客で開催される事も、北京パラリンピックの直後、ウクライナで戦争が始まりこんなに長く続く事になる事も、全く想像できませんでした。

「心と体を健康に」という人間のあたりまえの願いは、銃や砲弾の前で踏みにじられてしまいます。でも、焼け跡にも花が咲くように、絶望の中にささやかな希望を見つける事ができるのも人間です。そんな「希望」を舞台で描き、「平和を願う心」を会津の皆様と交し合いたい、と願っています。

いつだって青空 演出 栗城 宏